

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H04387

研究課題名(和文) 日中戦時下の中国語雑誌『女声』研究 フェミニスト作家田村俊子編集長の視点から

研究課題名(英文) The joint research of the Chinese-language magazine Nu-Sheng in Japanese-occupied Shanghai from the viewpoint of Toshiko Tamura, the feminist writer-executive editor

研究代表者

山崎 真紀子 (YAMASAKI, Makiko)

日本大学・スポーツ科学部・教授

研究者番号：00364208

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：2023年12月『日中戦時下中国語雑誌『女声』フェミニスト田村俊子を中心に』(春風社)を刊行することができた。

内容は、田村俊子が本誌を刊行するまでの背景や刊行の目的を詳説、編集の片腕であった関露のフェミニズム思想を記事から抽出し、関露の背景とその後を論じ、上海の政治空間を国際的な視点で論証。雑誌刊行の資金源の日本軍のプロパガンダ性、映画欄・演劇欄・児童文学欄などの記事分析から本誌に通底されている編集方針の分析や陶晶孫と田村俊子の交流の様相、雑誌の巻頭言とあとがきの分析、田村が注力した読者の身の上相談欄から見える田村の思想性と戦時下の中国人読者との交差など、中国語記事を日本語に翻訳し分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『女声』はこれまで関露を中心になされてきた。中国側による研究は論拠の提示がなされない論文も散見された。本研究では空隙だった資料の提示を埋め、綿密に明示することができた。研究代表者は日本文学研究の視点から作家・田村俊子の晩年期を明らかにすることを目的とし、田村が編集長だった『女声』の全体像をつかみ、田村のフェミニズム思想の実践を明らかにした。本誌の共同研究を通じて、戦時下における日中の女性が連携してフェミニズム思想を本誌で実践できたのかを客観的に検証できた。また重要記事の日本語翻訳を公表できたことも、日本側の研究を大きく前進させたといえる。

研究成果の概要(英文)：In December 2023, we were able to publish "Sino-Japanese wartime Chinese language magazine 'Josei', focus on feminist Tamura Toshiko" (publish:Shunpu-sha). The contents include a detailed account of the background to the publication of the magazine by Toshiko Tamura and the purpose of its publication, extracts from the articles the feminist ideas of Guanlu, who was one of the editorial staff, discusses Guanlu's background and what followed, and argues for the political space in Shanghai from an international perspective. The article also analyses the Japanese military's propaganda nature as a source of funding for the publication of the magazine, the editorial policy underlying the magazine through analysis of articles in the film, theatre and children's literature section. Tamura's focus, and the intersection with Chinese readers in the wartime period. Chinese articles were translated into Japanese and analysed.

研究分野：日本近現代文学 ジェンダー

キーワード：田村俊子研究 日中戦時下の女性雑誌 日本占領下の戦時上海 日中女性交流史 フェミニズム 関露研究 日中戦時下の中国人の声 日本軍のプロパガンダ雑誌

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究を開始するまで

日本人作家・田村俊子(1884年～1945年)の晩年期研究

田村俊子は、日中戦時下の上海に身を置き、日中女性間の連携という難しい課題に取り組んだ。若き中国人女性へのエンパワメントとして中国語雑誌『女声』を創刊、3年間継続的に毎月刊行し続けることに心血を注いで命を閉じた。

研究代表者は日本近代文学研究分野に身をおき、田村俊子の晩年期である中国時代の研究を2007年から始めていたが、当時は現在のようにデジタル化された『女声』もなく、上海図書館でマイクロフィルムロールを購入し、帰国後に所属勤務大学図書館内のフィルムリーダーで目を通していった。

初めに浮かんだ疑問点として、田村俊子はなぜ、自らが自由に使うことができない中国語で雑誌を刊行したのか、ということだった。当時のほとんどの日本人作家は、占領下の中国で日本語雑誌を刊行している。まず、この点を解明すれば田村俊子という作家の終着点が見えてくると考えた。それには『女声』の記事内容を読み込むことが必要だと痛感した。

先行研究の空隙を埋める研究

『女声』は、これまで編集の右腕だった中国人女性で中国共産党員だった関露を中心に、中国側でなされてきた。その研究の主だった論文も、論証に必要な資料(史料)が明示されておらず、論拠が不明だった。おそらく中国研究者の国家に対する複雑な政治的な問題がはらんでいたと思われる。日本に住み日本人研究者である研究代表者は、中国側による関露から分析された、しかも論拠の提示に欠けた『女声』をそのまま受け入れることはできなかった。

だが、自ら調査しようにも日中関係が徐々に良好でなくなってきた過渡期にあり、中国の国家図書館で調査しようにも閲覧は許されず、資料調査の手掛かりが乏しく、徒に時間を要した。その突破口として、中国人の日本学研究者とコネクションを持つ日本人中国近代女性史の研究者と知り合っ、中国での研究にアクセスする方法や中国人研究者を紹介してもらうことなどができた。徐々に資料検索の方法を見いだしていった。

日本であれば、中国のように表現規制や資料提示の閉鎖性はなく、日本国内に居住しているゆえに資料調査は困難を極めるにしても、調査結果を伏せる必要はないし、表現も自由である。

このことから中国現地での資料検索に長けた日本人研究者で中国近代女性文学および女性史研究者の力を借りれば、先行研究における論証の不足分は補えると考え、共同研究を可能とする研究者とのネットワークづくりを始めた。

関露研究から田村俊子研究への移行、そのための準備

前述したように『女声』研究は中国側による研究が中心で、日本では中国女性史研究者が研究を進めていたが、やはり関露が中心であった。日本近代文学分野では田村俊子研究者が『女声』の総目次や販売価格、流通方法などは明示したが、本誌の記事内容に分析的に深く踏み込んでの先行研究は見当たらなかった。特に田村俊子が担当し最も力を注いでいたとの証言が残っている読者交流欄記事については、その内容に踏み込んで分析した研究は、本研究を開始しようとしたときは、研究代表者以外には見られなかった。

「編集長・田村俊子」に焦点化して記事を綿密に読むことは、これまでの研究の空隙を埋めることになるとともに、関露研究から田村俊子へという日本側から『女声』研究をする新たな研究の進展を可能とする。本研究を通して田村俊子が編集長として何を成し遂げたのか、また、その成し遂げたことから、彼女の作家としての晩年期を明らかにし、彼女の通底している思想性を明らかにすること、これらを目標としてあげた。

本誌をマイクロリーダーで目を通していった過程で、本誌のおおよその記事構成は理解できたので、各記事の分析が可能で、また中国で発刊されていた同時代の中国人によって発刊されていた女性雑誌との差異なども検証できる能力がある研究者、およびフェミニズムの視点で分析実績を持つ中国女性史研究者とのネットワークを地道に作り始め、共同研究を実現するための準備を開始した。

上記をまとめると、『女声』全巻38巻を対象に、じっくり読み込む力がある研究者であること、現地調査が可能で中国人研究者とも交流があり現地での資料検索が迅速で効率的に行えること、当時の中国人によって刊行されていた女性雑誌の分析研究経験を持ち、その分析能力に長けていること、これら3点に焦点を絞って共同研究者の候補を立て、積極的にアプローチしていき、信頼関係を構築していくことに時間を費やした。

(2) 研究開始時

本研究に賛同し上記の研究能力を持つ研究者が揃い、本誌研究を総合的に行える土壌が調っ

たので、科研費申請を行った。田村俊子研究を30年継続してきた日本近現代文学研究者を研究代表に、研究分担者には同時代の中国女性雑誌研究者3名が、同様に研究協力が2名、みな10年間の研究経験を持つ。この研究協力者の2名のうち1名は中国人研究者であり、近代中国の出産研究を通して広く中国女性史研究を推進している。もう1名は中国語から日本語への翻訳に長けた翻訳者としても実績があり、中国文学および中国史の両研究経験がある。ほかに映画史研究者には田村俊子の映画記事分析を皮切りに本誌映画記事欄分析が行える研究者を分担者として依頼し、共同研究をスタートした。

開始時は田村俊子研究が本研究の主軸であったので、田村俊子が中国に渡るまで身を置いていた北米18年間の経験を調査すべく、カナダ文学研究者も研究分担として1年間お願いした。しかし、その分担者は個人的事情で多忙を極め、かつ中国研究に関して支障が生じ、1年で本研究から外れた。

ちなみに「開始時」項目から外れるが、2年目からは日本史から見た上海史などの研究者が分担者に加わり、3年目からは中国演劇研究者が分担者に加わった。4年目には中国文学者が研究者として加わった。このことは多層的アプローチを可能とし、研究の水準を高めたこととなったことを付記する。

本誌研究開始時にあたって、研究代表者が所有していた『女声』全巻のマイクロフィルムをデータ変換し、USBに入れて、研究遂行者各自のパソコンで容易に読める環境を調べた。データ変換に関しては後に同時期に上海で断続的に刊行されていた同名の雑誌や、同時代の上海で刊行されていた日本語新聞『大陸新報』も同様にUSBに入れて研究分担者や協力者と共有している。

2. 研究の目的

研究代表者は田村俊子研究を継続してきたが、彼女が編集長を務めた『女声』はこれまで日本文学研究では中国語で書かれたことが支障だったのだろうか、ほとんど研究が進んでいなかった。その研究を進めるために、「編集長・田村俊子」に焦点を当てた『女声』研究をすることとした。

研究の目的は、作家・田村俊子が本誌を創刊した目的を探り、刊行を通じて何を成し遂げたのかを明らかにすること。田村俊子がフェミニスト作家として、その思想や活動を本誌研究によって具体的に明らかにすること。本誌研究を通じて、彼女の晩年期の活動を明らかにすることで、彼女の作家活動に通底しているフェミニズム思想を明らかにし、日本近代文学分野において文学史的に田村俊子の位置づけの見直しを図ることの3点があげられる。

特に は田村俊子の最後の創作物といえる『女声』分析を行うことで、これまで田村の作家としての活躍期が北米に渡るまでの1918年までとなっている文学史上の評価を一新する必要があると研究代表者はかねてから抱いてきたことが背景にある。

これらの目的を果たすためには、『女声』全38巻すべてを読み、記事構成、記事内容、読者交流など記事に細かく分け入って、雑誌の全貌を明らかにすること。本研究における主たる目的は以上である。

さらに日中戦時下末期に刊行されていたことから、資金提供している日本軍のプロパガンダ性を探り、日本側は何を目的として刊行していたのか、日本軍から資金や物資提供を受けて田村俊子は何をしようとしたのかを本誌分析を通して探ること。つまり、これらのバックグラウンドを視野に入れ、編集長として田村俊子が何をなそうとしていたのか本誌研究を通して明らかにしていくことで研究の進展を図ることが、研究を開始してから新たに加わった目的となったことも付言する。

3. 研究の方法

『女声』研究会を立ち上げて、『女声』全38巻すべてを創刊号から順番に読んで、分析を加えていった。1~2か月に1度、1回につき7~9時間程度（休憩時間を除く）の研究会を開催した。研究開始2年目からは、新型コロナウイルス感染症が蔓延し、対面での研究会が不可能となったが、zoomを使用して継続した。研究開始時から終了時の3年間を費やして、『女声』全巻を読む作業を変わらぬ熱意を持ち、欠席者もなく毎回順調に進めることができた。

記事内容を把握し、各自が関心のあるテーマを事前に選び、日本語訳のレジュメを作成し、研究分析結果を毎回、全員が報告し、その各自のテーマを会で討議していく作業を地道に行っていた。また、各自必要に応じて調査出張にも赴いた。

遡るが、この有益な研究会を開始できたのは2007年から研究代表者が辛抱強く研究の目的が果たせる共同研究者を探し、積極的にアプローチし、長い時間をかけて信頼関係を構築してきたことによると言える。

研究会の4年目である最終年度には各自が研鑽を積んだ結果を論文にまとめ、研究会内で発表し、意見交換を通じて練り上げていった。

なお、研究の視野を広め、知識を増やすために、本研究に直接的に深く関わる研究者をゲストスピーカーに招いて講演してもらった。『昭和文学の上海体験』の著者である関西学院大学文学部の大橋毅彦教授、『上海モダニズム』の著者・東京大学大学院人文社会系研究科の鈴木将久教授、『対日協力者の政治構想 日中戦争とその前後』の著者である津田塾大学学芸学部国際関係学科の関智英准教授に依頼した。会のメンバーは全員参加し、活発な質疑応答が行われた。この

講演会によって鈴木将久先生の陶晶孫研究が特に本研究には欠かせないと気づき、本研究会で手薄だった中国文学分野の研究協力者として4年目から加わってもらった。

また、国内で行われた日本近代文学系の3学会（日本近代文学学会、昭和文学学会、社会文学学会）合同の国際学会でパネル発表を、および昭和文学学会で口頭発表を行って、出席者から意見をもらった。

4. 研究成果

上記の研究方法でも記したように、これまで詳細に本誌を読み込んでいき、各自が担当した記事分析を研究論文にまとめ、研究4年目には中間発表を研究会内で行い、意見交換を通じて研究論文の質を上げ、論文を完成させた。

この成果を世に問い、研究の進展を図るべく、出版を計画した。あいにく新型コロナウイルス感染症の蔓延で、本研究会が主導で行う国際学会などの計画は立てられなかった。したがって成果公表は、出版することで世に問うことに絞り、最終年度の9月に科研費公開促進費出版助成に応募した。申請が通り、2023年12月『日中戦時下中国語雑誌『女声』フェミニスト田村俊子を中心に』（春風社）を刊行することができた。この学術書が本研究の研究成果である。

刊行された研究成果『日中戦時下の中国語雑誌『女声』フェミニスト田村俊子を中心に』（春風社、2023年12月25日）の内容は以下である。

まず前提として、『女声』記事名の中国語訳はそれぞれ執筆者によるもので、研究会を通じて練ったものである。『女声』全記事の中国語原題は、巻末資料の『『女声』総目録』を作成し、記載の巻・期も付してある。また、巻頭には中国の古書店で購入した『女声』原本のカラー写真を置いた。

「はじめに」（研究代表者・山崎真紀子）は、これまでの『女声』研究史に触れながら現時点での本誌研究の状況を述べつつ、本誌編集の構成員、本誌執筆者、そして中国共産党の命令で諜報活動を行うべく「女声社」に入社した関露のバックグラウンド、本誌刊行を可能にした資金や物資調達関係者など本研究で明らかにした本誌誕生までの経緯を説明した。本誌にかかわった人物の関係図も上げてある。この図は、本誌がいかに複雑な人間関係のもとで成立していたか、かつ戦時下であることの特異性を明瞭かつ可視化できるようにレイアウトした。そして、研究公開本書全体の論旨をあげてある。

総論では本研究全体の理解を助けることを骨子とした3本の論文（第1章～第3章）と関露が東京で開催された第二回大東亜文学者大会に出席した報告記2本を日本語に翻訳して置いた（須藤瑞代訳）。後者の翻訳文は、当時の日中関係を日本側の文学者がどのように捉え、それに従わされた占領下の人々の違和感や屈辱感、苦悩が伝わる重要な記事である。この文章はレトリックが使用され難解ではあるが、日本語訳されたことによって研究が進展されることが期待される。

第1章「田村俊子と『女声』」（山崎真紀子）では、これまでの田村俊子評価が男性文学者によって論じられ規定され、やがて文学史から消えつつあった中で瀬戸内晴美が『田村俊子』（1961年）を著し再評価されたが、その言説でさえ作品や作家を男性目線で性的な面を偏重したものを踏襲し、田村俊子の思想性や言説を生み出す作家自体の知的側面や人間性をないがしろにしたものであったことを指摘した。本誌研究を通して見えてきた田村の真摯で公平で誠実な人間性に照らし、田村俊子という自然主義作家がこれまでいかに歪曲化されて文学史上に置かれていたのかを検証した。

第2章「関露の『女声』への参加とその後」（江上幸子）は、中国側の関露研究では明示されてこなかった論証にあたっての資料をすべて明示し、関露がなぜ本誌に参加したのか、そして、参加後には、中国共産党の命令に従ったにもかかわらず、漢奸の濡れ衣を着せられ何度も投獄され苦悩した晩年期を明らかにした。第3章「アジア・太平洋戦争期の政治空間と国際関係」（石川照子）は、本誌がいかなる政治的な空間で生まれたのか、上海という政治空間を詳述し、本誌が生まれた磁場を明らかにした。

『女声』の戦略性についてまとめた。第4章「プロパガンダの「責任者」としての編集長・田村俊子」（渡辺千尋）で、出資面から窺えば、日中戦争で有利に展開していくために日本軍が出資して若い中国人女性を馴致させるための文化的工作としての本誌であるという性格を持つことは免れないのだが、田村俊子というコスモポリタンの作家が編集長として雑誌を編集したことの意味に重点を置いて見た場合、田村俊子が出資を得ながらも宣撫工作にならないように、工夫を凝らして編集していった様子が分析を通して見えてきて、本論文ではその戦略を国際新聞などの記事を中心に分析した。第5章「『女声』の映画スペース」（宜野座菜央見）は、映画欄記事を緻密に分析し、時に同調を図り、忌避すべき内容は戦略も持って記し、日本側に好意を見せることを装いながら実は中国側の主張に基づいて構成されていった様子を論じた。第6章「『女声』における「先声」と「余声」の意義」（藤井敦子）は、雑誌の巻頭言と編集後記の記事分析を署名のあるなしや置かれた署名の1文字を手掛かりに、誰が書いたのかに迫り、本誌にかかわっていた男性編集人がいたのではないかと示唆した論考である。

関露と『女声』では、第7章「『女声』誌上のジェンダー論」（江上幸子）で、関露の記事を深く読み込み、記事から見える彼女のジェンダー論を明らかにした。関露は多数のペンネームをもって本誌に執筆している。ペンネーム一覧表を作成し、本書巻末に配置した。関露の思想が窺える彼女の長編小説で本誌にも連載されていた『黎明』の日本語訳も、本論文の後に置いた（石

井洋美訳) 第8章「『女声』劇評に見るジェンダー観」(中山文)は、関露が執筆担当していた海派話劇(上海における現代演劇)の批評欄を通して見えてくる関露のジェンダー思想を抽出している。関露の人間性が見えてくる分析となっている。

田村俊子と『女声』では、第9章「『女声』における「児童」ならびに豊島与志雄の童話」(姚毅)で、本誌で取り上げられている「児童」とはどのような存在だったのか、そして児童文学欄では豊島作品を中心に分析している。第10章「陶晶孫と田村俊子、そして『女声』」(鈴木将久)では、田村俊子が心を許し、親交が深かった日本語で小説も発表している中国人作家陶晶孫の掲載記事の分析と、二人の関係性を「文学者同士」という紐帯に重点を置いて論じた。田村が亡くなった際に『女声』追悼号に掲載された陶晶孫の追悼記事は、一読すれば二人の関係性がおのずとわかる文章なので、全文日本語訳して置いた(藤井敦子訳)。

第11章「『女声』における日本女性の存在と不在」(須藤瑞代)は、日本人編集長田村俊子の本誌編集方針は「日本人女性について語らない、掲載しない」ことであったことを明確に述べ、その不在性が田村の戦略であったとしている。第12章「田村俊子主宰「信箱」 戦時下における詩的言語の空間」(山崎真紀子)では、田村が注力した読者からの悩み相談欄である「信箱」の回答を、全期通読し、その読者からの投書を日本語訳で紹介しながら、戦時下の若き中国人女性(中期以降から男性も参入)の悩み、そして編集部による回答を通じて見えてくる、戦時下として特別にくくなくても日常生活は変わらず続いている様相を論じた。「信箱」はどの時代でもどの国の下においても普遍的な人間の営みはいとおしく守られるべきであるとした田村の思想が再現されている場として論を着地させている。

本論文では、3年間の「信箱」精読の結果、編集部の「私たち」が回答者であることに再注目し、これまでの田村俊子が一人執筆していたとした山崎による先行研究の前言を見直す必要も生じた。具体的には「信箱」の回答で、論調が著しく異なる文章がさし挟まれているものが見出された。田村の言説に関露の言説が加えられたと思われる回答では、中国共産主義思想から生み出されたと思われる、もしくは党の命令からかもしれないが、若者を鼓舞し社会貢献を訴える回答もみられたのである。結論として田村が主催していた読者交流欄「信箱」は公的言語に侵されず、日常の私的な生活を何よりも大切にすることを訴えたものだったとした。

この分析によって、田村俊子研究で空白だった晩年期が、この「信箱」欄の回答を通じて浮上させることができ、田村の生涯を貫いた思想性や成し遂げたかったことを明らかにすることができた。

巻末には上述した項目のほかに、『女声』記事総目録と索引が付されて、研究の一助となると思われる。本誌を詳細に分析し得た成果は、先に述べた田村俊子という明治・大正・昭和前期に活躍した日本人作家が、どのような文学世界を構築し、現在、どのような文学史のもとにおかれなければならないのかを再検証するうえで貢献できたと思われる。また、共同研究を通して、日中女性関係史の研究にも大きく寄与できたと考える。

中国語で書かれてる『女声』を、日本語でその全貌や内容を掴むことを可能にしたこと、そして、複雑な時代背景や人間関係を読み解くための重要な記事は適宜日本語訳を載せることで、日本発信の研究の敷居を低くしたことが、研究成果としての何よりもの意義である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 石川照子	4. 巻 267
2. 論文標題 中国農村におけるキリスト教とジェンダー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 224 ~ 236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山文	4. 巻 267
2. 論文標題 姉妹の越劇	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 141 ~ 156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須藤瑞代	4. 巻 267
2. 論文標題 つながる女性たち 戦時期『上海婦女』を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 78 ~ 92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江上幸子	4. 巻 267
2. 論文標題 『今代婦女』 中国初の女性向けグラフ誌	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 60 ~ 77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宜野座菜央見	4. 巻 267
2. 論文標題 グレー・ゾーンに分け入る フー・ポシェックが示す視野の意義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 明治大学図書館紀要編集部会『図書の譜 明治大学図書館紀要』	6. 最初と最後の頁 21～28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山文	4. 巻 42
2. 論文標題 もうひとつの越劇史 3つの『舞台姉妹』をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸学院大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 165 174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江上幸子	4. 巻 30
2. 論文標題 1930年代上海の中共女性指導者・陳修良 抗戦観とジェンダー観を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国女性史研究	6. 最初と最後の頁 41～61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宜野座菜央見	4. 巻 18
2. 論文標題 ポストコロナ理論で救えるか：田村俊子『移民』小説	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア太平洋センター年報	6. 最初と最後の頁 47-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江上幸子	4. 巻 29
2. 論文標題 上海婦女における日本 / 日本女声の表象	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国女性史研究	6. 最初と最後の頁 17 31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宜野座菜央見	4. 巻 17
2. 論文標題 映画人・川喜田長政の戦略性：田村俊子との対照	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター	6. 最初と最後の頁 13 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 江上幸子
2. 発表標題 『今代婦女』：中国第一本婦女画報
3. 学会等名 婦女開放視野中の丁玲：中国与世界」第16次丁玲国際學術検討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 石川照子
2. 発表標題 日中YWCAの交流と葛藤 『女青年』『女子青年界』の記事を中心として
3. 学会等名 東アジア近代史学会第26回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山崎真紀子
2. 発表標題 田村俊子の二十五年 中国語雑誌『女声』編集長・左俊芝としての終焉
3. 学会等名 昭和文学会春季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江上幸子
2. 発表標題 1930年代の上海における宋慶齡
3. 学会等名 中国女性史研究会，宋慶齡研究会共催
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宜野座菜央見、山出裕子、山崎真紀子
2. 発表標題 異言語圏での葛藤 田村俊子の軌跡から見る言語の身体性
3. 学会等名 日本近代文学会、昭和文学会、日本社会文学会合同国際研究集会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江上幸子
2. 発表標題 抗戦期上海の中共女性指導者・陳修良
3. 学会等名 北京大学医学人文学院（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江上幸子
2. 発表標題 1930年代上海のメディアと丁玲
3. 学会等名 中国丁玲研究会（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 山崎真紀子、江上幸子、石川照子、宜野座菜央見、中山文、鈴木将久、須藤瑞代、姚毅、藤井敦子、渡辺千尋	4. 発行年 2024年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 400
3. 書名 日中戦時下の中国語雑誌『女声』：フェミニスト田村俊子を中心に	

1. 著者名 周程，江上幸子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北京大学医学出版社	5. 総ページ数 123
3. 書名 中国医学人文評論 2020	

1. 著者名 王晴，江上幸子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 上海遠東出版社	5. 総ページ数 406
3. 書名 日本漢学中の上海文学研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中山 文 (NAKAYAMA Fumi) (30217939)	神戸学院大学・人文学部・教授 (34509)	
研究分担者	石川 照子 (ISHIKAWA Teruko) (50316907)	大妻女子大学・比較文化学部・教授 (32604)	
研究分担者	宜野座 菜央見 (GINOZA Naomi) (50795557)	大阪経済法科大学・公私立大学の部局等・研究員 (34427)	
研究分担者	渡辺 千尋 (WATANABE Chihiro) (50812731)	東洋大学・経済学部・講師 (32663)	
研究分担者	須藤 瑞代 (SUDOU Mizuyo) (70844687)	京都産業大学・国際関係学部・准教授 (34304)	
研究分担者	江上 幸子 (EGAMI Sachiko) (90277955)	フェリス女学院大学・国際交流学部・名誉教授 (32711)	
研究分担者	山出 裕子 (YAMAFDE Yuko) (10452038)	明治大学・政治経済学部・兼任講師 (32682)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	姚 毅 (You Ki)		
研究協力者	藤井 敦子 (FUJII Atsuko)		
研究協力者	鈴木 将久 (SUZUKI Masahisa)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関